



—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

イエメン：サーレハ大統領のサウジ入りは「亡命」か？

研究員 河井 明夫

6月3日の金曜礼拝の際に大統領宮殿のモスクが砲撃を受け、同大統領は頭部などに傷を負った。治療のためとして翌4日夜、同大統領は、一緒に負傷した政府高官や家族の一部らを連れてサウジの首都リヤドに空路到着した。同地の病院では、爆発で体内に突き刺さった破片の除去や顔に負った火傷などの手術が行われた。サーレハ大統領がついに「亡命」した形となり、5カ月近く続いているイエメンの混乱は新たな局面を迎えることになった。

今回のイエメン出国、サウジ入りが本当の意味での亡命となるかどうかは今のところ全く不明である。公式報道ではあくまでも「治療のための一時的な出国」とされているが、今年1月半ばにチュニジアの政変で国を追われたベンアリー前大統領一族が最終的に逃げ込んだのもサウジであり、それ以前にもサウジはウガンダのアミン大統領などの亡命先となっており、今回のサーレハ大統領の行動は示唆に富むものである。

欧米やアラブのメディアは、サウジ、イエメン両国の公式報道のように、術後の「2週間の静養」の後、サナアに舞い戻り、再び大統領としてイエメンに「君臨」するのかどうか注意深く見守っている。一方、イエメンの野党・反政府勢力は、サーレハの帰国を阻止すると脅している。既存の野党の連合である「合同フォーラム」は、出国そのものを「この腐敗した独裁体制の終わりの始まり」とみなし、これを歓迎する一方で、大統領代行に就いたアブドラッポ・マンスール・ハーディー副大統領とは協力していく用意があると表明した。しかし、サーレハ大統領の長男で最精鋭部隊、共和国防衛隊を率いるアフマド・アリー・アブドラー・サーレハ准将を始めとする同大統領の一門が、国内に残っており、彼らの動向が注目される。

そうした今後の問題はさておき、街頭で4カ月以上に及び政権打倒を叫び続けてきたイエメン大衆は今、サーレハ大統領の出国を喜び、「イエメンは、お前がいなくなって、より素晴らしくなった」というプラカードなどを掲げ、歓喜に沸いている。一方ではサーレハを受け入れたサウジの仲介によりイエメン国内では停戦が合意されたものの、その直後の6日にはサナアなどで部族民兵3人を含む計6人が死亡するなど、まだまだ予断を許さない状況が続いている。

※この詳細版を、中東分析レポート No.R11-006「イエメンのサーレハ大統領がサウジで傷の治療～「亡命」かをめぐり乱れ飛ぶ憶測～」として、当会 HP に掲載する予定ですが、閲覧には当会発行のパスワードが必要となります。ご不明の方は、当会事務局までお問い合わせ頂けますようお願いいたします。

(以上)